

この本の基礎編である肝臓、構造・機能・病態生理はかなり苦勞して読み直し書評のような感想のような雑文をのせていただいた。ひき継いで、臨床編である「肝臓病」について書評するようにとのことである。たいへんおこがましい話であるが、本書が出版されてからずっと「肝臓病」の出版を待ちこがれていただけに、ずっしり重い本書を手にしたときは本当に嬉しかった。

講義とか回診という理由もあった、このところ書棚には肝臓関係の本がどんどんふえているし、肝臓領域にどしどし良いモノグラフが出版されつづけているのに感心している。

最近手にした E. A. Gall ら編集の The Liver (Williasms & Wilkins, 1973) とか Popper らの Progress in Liver Disease, Volume IV (Grune & Stratton, 1972) など問わずかな時間でも割いて、たいへん興味深く読んでいる。

この「肝臓病」は約1カ月かけてゆっくり読んだ。いっぱい赤線を引いてしまって、すっかり本がよごれてしまったが、確かな読みごたえを

□書 評□

「肝 臓 病」

編集=高 橋 忠 雄
織 田 敏 次

東京女子医科大学消化器内科
竹 本 忠 良

感じたし、うすよごれてしまったこの本が一層いとおしい気持がする。

Malabsorption syndrome 起こさないで、確実に肝臓病の臨床についての濾過された知識のエッセンスが消化・吸収され、たくわえられたと思う。

内容は当代一流の肝臓病学者の手になっただけに、まったくむだがない。そして専門家の細かなフィルターを通してだけに完全に整理された最新の知識がまったく抵抗感なく吸収できることはありがたい。

肝臓病の臨床を理解するうえにぜひ必要と思われる形態、生理、生化学、肝炎ウィルスについても約100頁がさかれており、約1,000頁の1/6を占めている。

胆嚢・胆道疾患についても、継子

あつかいにしないで約70頁書いてあることも嬉しい。

症候論、診断、肝疾患各論は本書の最も大きな部分を占めているのは当然であるが、いずれも力作であって、分担執筆者自身できあがった本書を手にして本のできあがりに満足しておられるだろうと思う。

治療は治療結論としてまとめられているが、最新の治療に関する知識までが理論にうらづけられしかも批判的に述べられている。

このような大書は数多くの専門家がそれぞれの最も得意とする領域について知識のエッセンスを凝集したから生れるのであって、おそらく単独執筆の著書では到底これだけのレベルは示すことができないであろう。

とにかく、消化器病を専門とする人には必読の書であることは至極当り前の話であるが、ひろく内・外科医そして学生まで読んでもらいたい最近の大ヒット作品である。編集者の労苦に深く敬意を表する次第である。(B5, 956頁, 図205, 写真220, 原色図12, 20,000円, 千300円, 医学書院刊)